

(二) 大学・短大関係者

研究生生活の出発点

山内洋一郎

奈良に転じて九年、その間屢々母校のような気持ちで訪づれ、発展の様子を見てきましたし、広島まで帰る時は、先輩・知友と逢っては、いつしか文教談義に移るのが常でした。私の研究生生活の出発点であり、研究を育んでくれた大学ですから、やはり母校と思うのです。辛いことも不満なこともありました。しかし、研究者の最

大の栄養である自由な雰囲気、精神の自由があったことが、未だに懐しく思わせるのだと思います。

可部女子短期大学国文科創設にあたって着任したのが武田学園との最初ですが、その直前に横山邦治氏に誘わ

れて訪づれ、入試の採点を当時の学長室の前でしたことを今に記憶しています（もちろん採点料はなかった）。

短大・文国の第一期生からずっと教えて八年間、その名列表を机上に並べると、個性ある顔が眼に浮んできます。もちろん当時の顔で、入学時に芋に目鼻付けたような感じが卒業時には瑞々しい女性になったのに驚いたものですが、今ごろはどのような女史・令夫人になっておいでか。賀状の続いているのは十数人、やはり嬉しいものです。

授業で記憶に鮮やかなのは、国語学演習。木之下正雄著『平安女流文学のことば』をテキストとし、「あはれ」「うつくし」「きよらか」「なまめかし」など美意識を表す重要な語を各自に一語ずつ分担させ、テキストの記述を追いながら解説し、『源氏物語』などで実際にそのよ

うな意味用法をしているかを検証するという授業です。

「いとほし」でも当たろうものならさあ大麥、『源氏物語』の三百を越す用例を全て読解し、前後の文脈を踏まえて意味用法を把握し、三百の用例を分類・整理して、木之下氏の論の適否を判断する。発表のためにそれをプリントする、という作業が更に必要です。こうして、多くの者が三週間ほど前から調査にかかり、寝食を忘れて（とまではいかなかったが、徹夜組は確かにいました。）大奮闘したのでした。私は今もそのプリントは大事に残しています。そして、奈良で同じ授業をしてみても判ったのですが、文教の学生諸嬢はまことに優秀でした。まず手を抜かずじめに徹底した発表だったこと、次にその分析・説明もそれ以上のものは奈良でも聞かれなかったこと、こうして離れてみて、優秀さに気づくとは、当時叱りつけ皮肉ってばかりいたのを申し訳なく思うのです。想い出は次々と湧いてきます。山根安太郎先生を始め上司同僚の先生方との楽しかった日々、図書館と紀要の仕事、ワンゲルクラブの顧問だったこと等々、私にとっ

て貴重な八年であったと実感しています。そういう大学であるからこそ、私は武田学園の弥栄を祈らずにはいられません。（奈良教育大学教授・元本学教授）

充実した一年

直野 裕子

広島文教女子大学は、私が大学教員として初めて教壇に立った思い出深い大学です。ちょうど十七年前のことでした。当時は可部女子短期大学と呼ばれており、英文関係は小田忠先生、小川登先生と私の三人であったと記憶しています。第一期の英文科の学生が、文化祭で英語劇“Say It With Flowers”を上演したことを覚えています。先輩もいらないか一生懸命練習した学生の皆さん、今どうしていらっしゃることでしょう。三十代も半ばのいい奥さんお母さんになっておられることでしょう。

教授会は、玄関を入れて右側の廊下のつき当たり、私たちのいました研究室の前で行われ、少人数でもあって

どの科の先生方とも親しく交わらせていただきました。次の年度から国文・英文は四年制大学として発足するということで、私たち皆希望に燃えていました。四年制の大学として認可されるに必要な英文関係の図書の分類をしたことは、何より強く印象に残っています。分類法など全く知らない上に「あんたのようにぶきっちょな者がよう嫁に行ったな。」と小田先生にいわれたくらいの者が分担するのですから、随分時間もかかりました。でもやり終えた時の満足感はひとしおで、小田先生のお宅で横山先生、山内先生、佐久間先生それに紀伊国屋書店の方々と乾杯したことでした。

主人転勤のためわずか一年しか勤務できず、お役に立つことがなかったことを申し訳なく、また残念に思っております。私が退職した春には暗れて広島文教女子大学が発足し、紀要の第一巻には拙い論文ながら掲載させていただきましたこと、光栄に思っております。その後私の方は岡山から関西に移り、今まで一度も広島文教女子大学をお訪ねする機会がありませんでした。亡くなられまし

た恩師の田辺昌美先生をはじめ、小田先生、横山先生より、広島文教女子大学の立派になっている様子を時折お聞きしていました。わずか一年の勤務ではありましたが、懐かしく思い出しております。

(甲南女子大学教授・元本学講師)

草創期国文学研究室寸景

榎林 滉 二

昭和四十三年から四十六年まで三年間、私は広島文教女子大学に在学した。山根安太郎先生の陣頭指揮下、国文学科、国文科の創立期、模索の時代であった。大学は最高学年が二年生で、勤めて二年目の昭和四十五年、第一回生が卒業した。私にとって、可部の三年間は、心に沁みるほど懐かしい。しかし、どんなに甘く採点しても、私は良き教師とはいえなかった。技量、識見ともに稚拙、浅薄、気分だけ教師のつもりでいた。いわば観念のみ先行して、実態の伴わぬ教師生活であった。思えば

実にいやな教師であつたらう。

四十四年から四十五年の、主に大学の学生たちと行つた近代文学ゼミナールの資料が出てきた。紙幅の関係で、四十四年度だけ、何を讀み何を考えたか、摘記してみたい。どういう方法でテキストを揃え、どういう形の導入をしたか、記憶に定かでない。

昭和四十四年五月二十九日、題材選定の会、泉鏡花、有島武郎、太宰治、プロレタリア文学、安倍公房、現代詩などが出る。投票の結果、有島三、鏡花二、安倍二、その他三という形で、有島武郎に決まる。

六月十二日、「カインの末裔」(久保田三千代氏担当)、作品構図考証、あわせて有島の作品系譜提示。それにより年間の担当者決定。

六月十九日「カインの末裔(第二回)」(久保田氏)、仁右衛門の心理追求。

六月二十六日「かんかん虫」(長岡誠子氏担当)徹底した文形調査論。七月三日「お末の死」(岡田洋子氏担当)死の問題、あわせて有島の少女志向を日記から調査報告。

九月十日「宣言」(唐川雅恵氏担当)、三角関係の図解。

九月十八日「宣言(第二回)」(唐川氏) Y子の倫理観、武者小路実篤の「友情」との比較論。

十月十六日「実験室」(松坂博子氏担当) 有島の日記、書簡の調査、視覚に訴える語の分析。

十月二十三日「小さき者へ」(岡田洋子氏担当) 父と子の悲しさ追求。

十一月十三日「小さき者へ(第二回)」(岡田氏)、生の意味論、「Un Incident」への言及。

十一月二十日「生まれ出づる悩み」(小林美由記氏担当) 私と君との異同論。

十二月十一日「或る女」(久保田氏担当)、全四十九章の構造論。

十二月十九日「或る女(第二回)」(久保田氏) 各人物における愛情の質。

一月二十二日、二月五日「惜しみなく愛は奪ふ」(久保田氏、唐川氏、松浦悦子氏担当)、愛の多様性について

て。

二月十二日「一房の葡萄」(松浦氏)、教師と子供の心。

二月十九日「宣言一つ」(徳永とし子氏担当)、広津和郎、片山伸の言及と対比。

思えば、よくもがむしゃらに読んだものと思う。その日はすでにすでに遠い。

(佐賀大学助教授・元本学講師)

オールド・ファミリアー・フェイスイズ

鉄村春生

「ある年齢に達したら、人は自分の顔に自信をもつべきである」といったようなことを耳にする。自信のある顔とはどういうことなのであろうか。

それがどういうものなのか、いまもってわからない。しかし妙なもので、武田学園時代(昭和四十一年～四十二年)の顔が自信のある顔でなかったことだけは、よく

自覚している。水が川床を選ぶようにして流れていた冬の根の谷川の土堤で、実が赤紫色に小さく熟していた桑畑のそばで、黒っぽい制服の学生に出会ふと、あわてて教師という虚名の顔をつけていたからだ。教室のなかでは、そのマスクはかぶりっぱなしであった。

教師という自分の顔にある強がりを感じることに、いまも昔もさしたる違いはないものの、あの時代ほどそれがこしらえものの顔であるというふうに感じたことはない。

ただ、あの二年の歳月は、いまにして思えば、人間関係がこの世のものともいえぬほどに濃く、密であった。それが虚顔のたった一つの支えとなった。わたしは巨人軍のオールド・ファンであるから、その支えの代表をかりにO・Nとも呼んでおこう。Oさんは、その傍にいらるだけで、生きることのシャープな中身を伝えられる人であった。可部を去る最後の夜に聞いた、「文教を忘れることができるんなら、忘れてみいや。」というその人のことばは、耳底から消えない。Nさんは、人の心の奥行

きを常に暖かく持ちまわっている人であった。この人は長崎水害のさいにもきらりとその所在を明らかにした。

自信をもってよい顔というものが大学にあるとすれば、それはこういった人々の集団であろう。しかもそれは、たんなる学問や研究でつくれる類の顔ではない。実は、自信をもってよい顔が大学にあることを知ったのは、はからずも三年前の盆、大分の教え子たちに招かれた学会の席上であった。文教に勤めた私の過去など知るよしもなく、頭髮をうすくして隣りに座った中年の教え子は、文教の英文学科の自慢話をしかけてきた。さり気なく訊ねると、たんに隣家の友人の娘が通っているにすぎないという。それにしては、恐るべき肩の入れようである。文教で働いたもののみが経験できる、感動の長い一瞬であった。そして、わたしのマスクの綻びを防いでくれたあの人たちの風土が、広島文教女子大学の一つの顔をつくったのだ、と即座に理解した。

三十五の年輪で、自信のもてる顔がいくつも武田学園に加わったことであろう。慶賀すべきことである。

(長崎大学教授・元本学助教)

大学草創期に勤めて

伊 東 亮 三

私が武田学園にお世話になりましたのは、昭和三十九年四月から四十三年一月までの約四か年です。前半の二年が可部女子短期大学で、後半二年が広島文教女子大学ということになり、学園史的には大学の草創期に勤めたことになりました。赴任しました時は、まだ大学教官用研究室もなく、高校校舎での借り住まいでもあり、いささかわびしい気もしたものです。

もっとも印象に残っているのは、武田ミキ学長の人間味豊かなお人柄です。すべてをさらけださせて大学教官一同の活躍を期待される。学長の気取られない、しかも前向きな姿に私はどうも弱く、できるだけのご協力しなければという義務感を抱かされたものです。

研究教育面では、横山先生がよい意味での大学として

の理念を持っておられる方でしたので、私どももやりやすく、また女学校的なものをアカデミックな大学へ変えたいと努力したつもりです。

新しい四年制の大学の名称をどうするか、横山先生と遅くまで議論しあったのも懐かしい思い出です。また大学設置のために図書をどう集めるかと苦慮し、広島市内の古本屋の本を片っ端から買い入れたりしたものです。今でも図書館に古本であまり役に立たない本があるとしたら、その時のものです。四年制大学設置時の横山先生の積極さや事業家的才能には、多くのものを学ばせてもらいました。

しんどい思い出は学生募集。性格的に私には不向きで、セールスマンの経験をしたような気がします。車で広島・山口県下のほとんどの高校をめぐったのは、よい勉強になりましたし、今では懐かしい。

初代ですが、学生部長をやりました。まだ若くて問題処理に未熟なところもあり、いま考えても後悔することばかりです。山根先生から、学生を叱る時には逃げ道を

作っておいてやるものだと言われたことを、ありがたく思い出します。不慮の災害で亡くなられた先生のご冥福をお祈りします。

その後、可部から神戸大学へ転任。いままた広島に戻ってきておりますが、短大から四年制大学へ発展する苦労の多かった時に働かせていただいたためか、今でも広島文教女子大学のことが、なんだか他人事と思えない気がするのです。

(広島大学教授・元本学助教授)

学園訓のような人

杉原 黎子

昭和三十九年四月、武田ミキ学長より「可部女子短期大学助手を命ず」という辞令をいただいたのが武田学園とご縁の始まりであり、同時に私の教師生活のスタートでした。金沢大学に移るまでの四年間勤めました、終わりの一、二年は健康を害して、多くの方々にご迷惑

をおかけしました。今思い出しましても、まことに申しわけなく、また残念な気持ちで一杯です。

当時の可部女子短期大学には、被服科、食物栄養科、食物専攻、同栄養専攻の三コースがありました。私は被服科に所属し、被服整理学、染色実習を担当しました。被服科の常勤教官は、武田ミキ（学長兼務）、岡田ハナコ、内藤昭子、引地妙子、遠藤眞子の諸先生と私の六名だったと思います。非常に家族的な雰囲気でした。学生は、一学年約百名が二クラスずつに分かれていました。私は就任早々に一年A組の副担任を命ぜられ、岡田先生と一緒に学生の生活指導をすることになりましたが、先生にとっては、かえってやかいかいな学生が一人増えることになったようなものではなかったかと思えます。しかし、先生から多くのことを学ばせていただきました。

教室の前、黒板の上には「学園訓」が掲げられています。三つくらいあったかと思いますが、今思い出すことのできる私の好きな言葉は、「正義を愛し、勤労を尊ぶ人になりましょう」、「謙虚で優雅な人になりましょう」

です。先生は、まさにこの学園訓を地で行くような方でした。私もなんとかして先生のようになりたいと願いつけて今日に至っておりますが、まだまだ努力が足りないかと反省することのみです。

五号館の研究室で、附属高校の山本好子先生と机を並べ、染色のことや学生指導のことなど公私両面にわたってご指導をいただいたこと、学生たちと夜遅くまで大学祭の準備をしたことなど、なつかしく思い出されます。

この春には、四十二年度に副担任をした食物専攻A組の卒業生が岡山でクラス会を開いて、徳島、島根からも十人もの方が集まりました。皆さんがすばらしい家庭を築いておられ、そのうえに職業人としてもがんばったり、PTAで活躍したりなど、立派な社会人に成長された姿に感激しました。また最初に副担任をし、卒論指導をした一人は、現在東京在住で、上京の折に時々会っては思い出話に花を咲かせています。

武田学園のめざした人間教育がみごとに結実していることを、卒業生とのつきあいをとおして知ることがで

き、その学園に在籍させていただいたことを誇りに思っています。また武田学園で得た多くの経験は、私にとりまして、何にも代えることのできない貴重な財産です。

(岡山大学助教授・元本学講師)

短大とともに歩んで

岡田 ハナコ

私がこの大学にご縁をいただいたのは、昭和三十八年四月で、短大発足の二年目に当たり、可部女子短期大学の名称で被服科だけの短大でした。

中島校舎の附属高校と同居で、短大は南寄りの三階建に、和裁室は二階、洋裁室は三階にありました。廊下の南側を見下すと、向いの校舎との間に芝生に囲まれた池があり、中に小高い緑の丘があって、放課後など学生たちの唯一の憩いの場でした。

三十九年に食物科、栄養科ができ、翌年には国文科、英文科、更に二年置き位に四年制大学の国文学科、英文

学科、次は短大の幼児教育学科、附属幼稚園と創設され、学生数も数百名となり教官の方々もそれぞれにお集まりになって、大変大きく発展しました。

四十五年、被服科に二つの変革がありました。その一つは学科名が服飾学科となったことです。社会が大きく変わりつつある今日、被服も作ると同時に選ぶことも必要となってきました。あらゆる既成服が一般市場に出回っている現在、いかに正しく選ぶかに重点を置き、学生も服飾界の多面に亘る知識を学ぶために、教科内容も変更されました。もちろん製作時間縮少のため技術の下らないよう心を配りました。

その二は新校舎が落成したので、すべてにおいて整った校舎で学ぶことになり、中島校舎から上原校舎に移転しました。新校舎は各方面において完備され、服飾学科の新しい構想による教官方も強化され、力強くなってきました。例年の文化祭にも学生たちの協力により、ファッションショウや製作物の研究成果を具体的に外部に示すなど、服飾学科が短大最初の学科だけに、社会の歩調

に合わせ、さらに前進するよう常に心がけていました。

可部には情緒豊かなものがありました。大学の行き帰り、春は一面の蓮華田を、夏の夜は根の谷川のホタルが飛び、秋は畦道一杯の彼岸花など、いろいろと楽しみがありました。

私専、四十八年十二月二十七日の明け方、起きようとして脳溢血になり、四カ月余り欠勤しましたので、大学にも、同科はもちろん他の教官方にも、学生の皆さんにも大変ご迷惑をおかけいたしました、いろいろとお世話になりました。四月下旬やっと復帰することができました。その後三年余り大学にお世話になりましたが、七十歳を越しましたので、五十二年三月に退職いたしました。ただ今では、左足が少し悪いのですが他は健康で、土に親しみながら、「してもらおう」ことばかり考えず、「してあげる」ことに努めるなど、ご法に生かされて老を楽しく過しております。

(元広島文教女子大学短期大学教授)

未知の分野に挑戦

江後 迪子

昭和四十九年四月から五十四年三月までの五年間、「栄養指導」担当教師として在職しました。大学院で『食品分析』を研究テーマとしていた私が、『栄養指導』という未知の分野と結びつくことになろうとは考えてもみないことでした。

新しい仕事と共に、可部へ居を移しましたので、すべての環境が変わり、手さぐりの毎日が続きました。ベテランの出崎先生から引き継いだ私に、学長先生も何かにつけ心もとなく感じられることも多かったでしょう。よくおこごとを頂戴いたしました。

栄養士コースの学生は、一年次の春休みおよび二年次の夏休みを中心に学外実習に出ましたが、地図を片手に実習先への巡回指導をしたこともなつかしく思い出されます。遠方の実習先を尋ねるのに「足」の必要性を感じ

じ、可部の自動車学校へ入校する気を起こしたのも「栄養指導」を担当したことによるものです。

山口県の出身者が相当数いたことから、出身地の周辺での学外実習ができるように、いくつかの新しい実習先をお願ひしましたが、このことが時に就職にも結びつく場合もあってよかったです。

短大の学生を教えるようになって、それまでの高校教員時代と大きく違ったことは、短大の二年間で「社会にすぐ役立つ栄養士を育てる」ことの恐さを知ったことでした。目的を持って入学してきた学生に、責任をもって応えなくてはならないことです。学問に対しての真剣な取り組みはもちろん、言葉づかいや生活態度にまで気を配るようにしていました。幸いにも、食物科の先生方が一体となって対処されたことで、効果は大きかったですと信じています。

先生方は、時には夜の更けるまで討論し合い、またあつる時は杯を汲みかわしながら、またソフトボールやテニスに興じながら、全学の先生方の融和がとれていまし

た。

現在私は、別府大学短期大学部生活科生活文化コースで教鞭を取っています。可部に比べると大分は温暖で、冬も雪が舞うのは珍しく凍りつくこともほとんどありません。今では白一色の雪景色もなつかしく思い出されます。こちらの学生は気候のせいでもないでしょうが、文教の学生に比べてのんびりしています。入試シーズンになると、お互いライバルという面もありながらも、文教の応募者が増えているということを耳にするのは嬉しいものです。

私が在職していました頃は、文教が創立から二十数年経ってようやく定着してきた時期でした。これからは発展へと向かわれることでしょう。旧職員の一人として蔭ながらそれを願っています。

(別府大学助教授・元本学助教授)

文教雑感

空本和助

教員生活最後の活動舞台として、広島文教女子大学にたどりつくまでに、三十七年間あちらこちらの学校で、ある時期には順風平穩裏に、ある時期には荒波の中を航海してきたのであった。昭和四十四年広島大学教育学部を定年退職するや、直ちに本学教授として採用されたことは、この上もない幸運と感じ、勇躍して就任し、ご奉公を誓った次第である。

その当時、本学はすでに短期大学部とともに、四年課程の文学部も発足しており、特色ある女子大学として県内外の注目を集めつつあった。一般に、一家の家風は両親から始まり、クラスの級風は担任教師の性格から、一校の校風は学校長の人格によるといわれているのであるが、本学において私が体験したところも、まさにそのとおりであった。学長先生の人生目標はもっぱら『教育に

生き教育に死す』の一念であり、女子教育のために身を捧げることを生涯の使命とされているのであった。また、ご自身の長年の教育経験に基づいて『人間形成こそ教育の本質である』との一貫した教育方針をもって学生の教育・指導に臨まれた。この根本方針は教職員にも学生にも次第に浸透して学風をなし、社会一般もまた本学のこの学風を高く評価しているのである。

本学に就任して以来、私は全く新しい経験をすることになった。それは、毎年学生募集のために県外へ出張派遣されることであった。私立大学としては財政経営上必要なことであるが、同時にこれはまた大学における人間形成という点から見て、甚だ重要な意義を有するものである。もし学生が地もとの県内出身者のみから構成されていると、自然に視野も人間関係も狭く、とかく因襲的、封鎖的な気風になりやすい。大学教育である以上は、県境などは宜しく積極的に打破して、なるべく広い範囲から学生を集め、視野の広い人間形成ができるようにしたいものである。それ故に、たとえ財政経営上の必要がな

くならずとも、広く県外からの学生募集に努力することは、甚だ有意義であり必要なことと思われる。将来もこれを継続したいものである。

私が本学に就任した翌年、短大部に幼児教育学科が新設され、図らずも学科長に任命された。かつて富山女子師範学校に在職中、同校の附属幼稚園・附属小学校長を六年間つとめた経験があるのであるが、何分にもそれは大戦中のことであり、時代は変わってしまい、過去の経験は新時代の文教での幼児教育学科の運営や講義には役立たないものであった。学長先生の温かい励ましと、同僚各位の心からなるご協力、ご支援を頼りにして進むほかなかった。それにもかかわらず、昭和五十四年の創立記念式において、勤続十年、幼児教育学科の充実振興に功績大なりとして、感謝状と記念品をいただいたことは、まことに身に余る光栄であった。

(広島大学名誉教授・元本学教授)

ポプラと池と庭園と

光岡 始

この話は、武田学園が中島にあった昭和四十六年頃のことである。

正門を入ると庭園があって、心和ませる構えであった。曲った道を歩いて、石段を上ると校舎である。そこは鉄筋の大きな建物で、大学と高等学校の本部で、学長室はもちろんここにあった。

学長先生はここで病気を養い、ベットで陣頭指揮をなさったという。学園経営と教育への執念というのだろう。「なせばなる」という言葉は度々聞いたが、そのとおりのことがなされていたのである。従って学園を手離して現在の上原に移ることは、とても苦しかったと涙を浮べて話されたことがある。全く自分の子供と別れる気持ちだったろうし、一木一草への思い出があり、何もかも自分の手をかけたものだけに、断ち切れない切なさか

あつたのは当然のことである。

ポプラ並木は忘れられない。伸びることだけしか考えないような若木が並んでいた。上原の校舎に移っても、この並木の傍を通っていたので、春は若芽の瑞々しさを、夏は繁り繁った青葉のそよぎを見た。この並木は余り注目されなかったようで、見事だとも、学園の景観を添えるとも誰もいわなかった。しかし、秋の黄葉して散りかかる頃は何としても美しかった。門の右手にあったテニスコートのボールの音にまで、秋を感じたものである。

旧校舎で思い出に残るものとして、校舎の前にあつた鯉の池がある。周囲に土堤をめぐらし、まん中に噴水のある、風情のないものであつたが、太い鯉がたくさんいた。錦鯉も真鯉もいたが、いい鯉ではなかった。しかし私はこの素朴な池が好きで、立ち止まっては眺めた。生徒が残りのパンを投げるので、太っていた。人影が見えることやたらに泳ぎ廻って落ち付かない。

中庭にあつた空充秋さんの庭園のことは書かねばなる

まい。赤煉瓦の門の構成があり、水の無い池と、突き当たり石を積んだ小丘があつて、見事な石彫が置かれていた。芝生の周囲は赤煉瓦を並べて囲つてあつた。抽象造園なので、余り理解されなかつたようだが、すばらしい造型であつた。さらに煉瓦の一つ一つに、当時の生徒のものと思われる名前が彫つてあつたのは印象的であり、よい記念になると思つた。石の彫刻だけは上原校舎に移されているが、この庭園全部が移されていたらと、今でも思っている。

運動場も、生徒宿舎も、学長宿舎も、一物もなく消えて、全く昔を偲ぶよすがもない。跡地には市民病院が建つた。惜しい校地であり、校舎であつたが、病院になつた事は、大学に縁を持つ者の、せめてもの慰めである。

三十五年たった武田学園は、上原の地に隆盛を誇っており、輝しい現在と未来がある。

(広島文教女子大学名誉教授)

思い出細話

沢 富士子

私は、現在の服飾学科が被服科であった頃の昭和四十一年から五十六年まで勤務しました。十五年という時の流れの中には、多くの思い出があります。

一番強く心にあるのは、担当した被服構成学実習のことです。四十五年まで二年には和裁洋裁各々選択として週八時間おかれていました。学生たちは、被服の専門技術を身につけるといふ学科の目標を十分認識して、一人として選択しない学生はいませんでした。しかし、週十六時間という実習に日々追われ、製作提出期日の前日は徹夜する者も多かったようです。

実習教材の洋裁は Body Stand の製作と、立体裁断が特記すべきものだったと思います。実習時間の不足、学生個々の能力差などから、Body の製作は例年夏休暇に入っている補講で完成させました。Body の外形ができた

あたりから学生の眼も輝き、二日目にはマルチンの計測器で体型を区分し、ブレードをとめて完成させ、各自の分身ともいえる Body を大きな喜びをもって眺めていた汗だらけの顔が、今も強く印象づけられています。後期には Body を活用させてオーバコートを製作させました。

材料を生かすデザイン・裁断・製作技能の指導に腐心しました。大きな格子柄のメルトン、ツイードのリバースプルで、苦心の成果をあげたものなどはっきり思い浮かべます。作品完成の喜びは学生一人だけのものではありません。教師の喜びは、技術教育に携わる者に与えられる特権ともいふべきかと思えます。卒業前の立体裁断は、平面裁断の学習を重ねてきたおかげで学生の理解力はよく、グループ競いあう楽しい学習でした。

私は、実習の指導にあたって、単に作ることを追う技能の修得をさせてはならない。思考力や転移性の能力を育てる、それぞれの資質能力の啓培をはからなければと悩み、自分の授業行動を分析し、試行を繰り返して

来た日々を懐かしく思い起こします。また、私は学長先生から常々お聞きしました人間教育を、一人ひとりとのふれあいのできる構成学実習の中でこそ重視しなければと、情熱を傾け努めたつもりです。現在多くの卒業生がよき社会人、よき家庭の経営、よき母として生きている姿をきくにつけ、心暖まるものを感じます。

次に、担当した家庭科教育法で最も困難に思ったのは、学生の実際授業の指導でした。そこで、授業の行動分析や自己反省評価に役立てるため、四十五年にテープ・レコーダを購入してもらいました。学生には好評で言葉の癖も解ると現在も活用し、成果をあげています。このテープ・レコーダが思いがけない面に役立ったことがあります。四十八年十二月、当時和裁担当の岡田ハナコ先生が突然脳血栓で倒れられ、身を寄せられていた栗原医院の手厚い看護によって、次第に快復に向かわれましたが、四十九年三月の卒業式にはご出席不可能ということでした。卒業学年の主任でいらした先生のお心をお察しして、私は当時の松山純子副手に岡田先生のお卒業生

への銭の言葉をテープにとってこさせ、思い出の和裁室で聞かせました。この時のことは、一人ひとりの心の中にも今も深く刻まれていることと思っています。

家政系の新校舎は四十五年に完成し、九月に学生・教師とも力をあわせて中島校舎からミシンや机その他の備品を運搬し移転しました。研究室は旧校舎のそれとは比較にならない程明るく広く、感慨無量でした。

この被服構成施設については、三階に洋裁室と研究室、二階に和裁室と研究室の配置と、スペースが大学の方で定められていました。この付設施設について和裁関係は当時勤務されていた岡田ハナコ先生と内藤昭子先生があらわれ、洋裁関係は私が計画しました。

私はかねがね施設・設備は一教師一代のものであってはならない。次代にも活用し得るものを考えねばならないこと、授業研究が進んでいる今日、授業の将来像を想定して、それに役立つよう変容も容易であることも考えておかねばならないと思っています。こうした考えから、研究室には当時の予算では許されないとはいえ、計

測器のシルエッターやスライディングゲージ、評価測定器などの設営を思い、そのためのスペースを考え、戸棚などすべて移動できる設備品にしたわけです。教室の黒板は、掲示物や技能の一斉指導に役立つよう十センチ方眼のスチール板とし、OHPやスライド映写のスクリーンを内蔵する多目的から計画しました。

失敗したと反省していることが二つあります。その一つは、新設した示範台です。これは私の設計図面によらず請負い業者が学生の利用する引き出しに百センチ尺が納め得ないものを作り、せんかたなく急遽計画変更をよぎなくされたことでした。今一つは、アイロンのコンソートの位置です。窓側周辺に配置すれば使用の場合は固定し、窓側には特殊ミシンの配置は不可能です。そこで学生がアイロン使用の便を重視して、各作業機の床下にコンソートを配置しました。机の大きさや配置などから見て、最適の位置とはいえぬと反省しております。

被服科は本大学の創設学科で、私も関係教官はその伸展に心をくだいてきました。産業構造の変化に伴う衣

生活の変容への対応や高校生の進学の動向などを考慮されて、四十六年服飾学科と改められ、デザイン、材料学の学習が強化されました。このため、被服構成学実習は二年の選択八時間は六時間に、さらに四時間に、五十一年には三時間に変わっていきました。そこで被服に関する学習内容の見直しをし、その専門知識と技術の育成に苦心してまいりました。

五十三年には陣容、設備の整備によって衣料管理士養成の認可が得られました。このことについては、四十八年二月学長先生、当時学科長でいらした山本毅先生、岡田ハナコ先生、私の四人で京都の光華、成安の二女子短大と京都女子大学の見学に出向きました折、京都女子大学で材料学の北田総雄教授から衣料管理士養成についてお話を伺ったことが動機だったと思います。その後、研究を深め検討を重ねられ、学長先生のご決断のもとに準備が進められていったわけです。この間、学長先生、山本学科長先生のご尽力は並々ならぬものでした。

現在、服飾学科には、衣料管理士としての道、技術専

攻コースも開かれ、完備された設備の中で学習のできる学生 皆さんはおしあわせだと思えます。どうぞこれまでの先人の労苦を偲ばれ、真摯に研鑽をつまれんことを祈ります。三十五年の歴史に培われた建学の精神は、時代がどのように変わろうとも大切に継承されていかなばならないと思えます。

(元広島文教女子大学短期大学部教授)